

AO 入試 過去問題 2024

国際日本学部

国際文化交流学科

※問題は 2024 年度入試のものです。

【事前課題】国際日本学部 国際文化交流学科

課題:

あなたの描く自身の理想の将来像を具体的に記述してください。それは職業でも人生観でも構いません。なぜそのような将来像を描くようになったのか、そのきっかけとなった出来事・エピソードや、考えがそこに至った過程を、固有名詞（人名や地名（旅行先・留学先）、企業名、組織名等）を使ってできる限り具体的に記述してください。

さらに、その将来像に行き着くために、国際文化交流学科における学びがどう生きるかを記述してください。国際文化交流学科は4つのコースに分かれています。所属したいコースについて具体的に記述しても構いません（2年次にコース分けがありますが、ここで所属コースの確約をするものではありません）。

そして、AO入学試験の志願者は国際文化交流学科が第一志望となりますが、他大学での学修と比較して、なぜ国際文化交流学科を第一志望に選んだのかを詳細に記述してください。

エントリーシートと内容が重複しても構いません。自分が一番伝えたい熱い想いをここで私たちに届けてください。

字数:

3,000字以上5,000字以下でまとめてください。

管理番号：Z-1

2024年度 神奈川大学 AO入学試験問題

1 / 3

AO入学試験【小論文】

国際日本学部 国際文化交流学科

試験時間 90分

次の長文を読んで、以下の問いに答えよ。

どうやら、いまの日本社会にあっては、「単純に割りきれないこと」「白黒つけられないこと」の存在が、人々をひどくいらだたせるらしい。そのいらだちの源は何かと考えるに、現代人の生活が複雑な要因や関係に絡みつかれ、すぐには見通せないということが、背景要因になっているのではないかとおもう。

社会のシステム自体が錯綜してきて、生き方も多様化しているし、インターネットやテレビなどから大量の情報とさまざまな意見が流れてくる。また、グローバル化の進展によって、今やスーパーに並ぶ食べ物一つとっても、その背後には交易関係や国際政治が幾重にもからみあっている。そのように複雑化した現代社会にあっては、「これはこうするのが正しい」と一口に言いきることが難しくなっている。

そうした社会に生きていくと、「複雑なものを単純化したい」という欲求、あるいは「悪いのは○○だ」「原因はこれだ」と言いきりたいという願望が、どんどんつものってくる。つまり、「言いきること、決めつけることでスッキリしたい」という願望である。その願望をつのらせた悪しき典型が、クレマーと呼ばれる人たちだ。

もう一重立ち入って考えるなら、複雑化した現代社会は人びとが「互いに世話しあう力」を喪失した社会である、ということも背景にあるようにおもう。近代以前の社会では、人びとがたがいのいのちの世話をしあっていた。お腹が痛んだら薬草を煎じて飲ませたり、もめごとがあれば地域の顔役に調停を頼んだり…。そして「世話する務め」をほとんどすべて外部のプロや公共サービスに委託するようになったのが現代社会である。おかげでわたしたちは安心して快適な生活を享受しているわけだが、そのことが一方では「たがいに世話しあう力」を人々から奪い去ってしまった。

出産の手助けも、傷の手当ても、看護も介護も看取りも、近所とのもめごとの解決も、じぶんたちの手には余る。一方で、公的なサービスには税金を、民間のサービスには料金をきちっと払っている。だから、サービスが劣化したり滞ったりした時、そういう機関に「文句を言う」ことしかできなくなっているのだ。

多くの日本人が「すぐに白黒つけたがる」単純思考にはまってしまった時代だからこそ、わたしたちはその逆方向に心を鍛えなおす必要がある。

①「噛みきれない想い」に潜む淀みをなおも見分ける力——それこそが知性の力であろうし、その力はこれからの時代、ますます必要になってくる。なぜなら、今後の日本社会は「多文化共生の社会」にならざるをえないからである。

コンビニのレジ係として中国の若者が働いていたり、介護の現場にフィリピン人が増えてきたりといったかたちで日本社会はすでに外国人労働者も目に見えて増えてきている。少子高齢化が急速に進む日本にあって、その数は今後増えてゆく一方だろう。そうした人たちと一緒に暮らしてゆくときに、異様なものを異質なままで認めて共存してゆくという難題に、わたしたちは取り組んでゆかねばならない。そして、白黒で割りきる思考法では、異

管理番号：Z-1

2024年度 神奈川大学 AO入学試験問題

2 / 3

AO入学試験【小論文】

国際日本学部 国際文化交流学科

試験時間 90分

なる文化的背景をもつ人たちとのコミュニケーションは成り立たない。白とも黒とも割りきれないグレイゾーンを受け入れ、その淀みをていねいに仕分けていくことこそが、多文化共生社会の礎となる。

そして、「多文化共生」とは外国人との共生にかぎったことではない。たとえば、現代においては、さまざまな専門家の知見は極めて先進化し、細分化されているため、専門家と一般市民の間には「異文化」といってよいほどの懸隔がある。医療の問題、地域環境問題、食の安全の問題など、どれをとっても、最先端の専門家の知見は、素人が聞きかじっただけではわからないほど高度化している。だからこそ、専門家と非専門家のコミュニケーションも、じつは「多文化共生」の課題の一つなのである。

そのため不可欠なのは、対話である。ただし、それは「ディベート」ではなく「ダイアログ」としての対話だ。

ディベートとダイアログの違いについて、平田オリザさんが、大要次のようにわかりやすく教えてくださったことがある。

“ディベート（討論）においては、対話の前と後でじぶんの考えが変わったら負けだ。逆にダイアログでは、対話の前と後でじぶんの考え方・感じ方が少しも変わっていなかったら、対話をした意味がない”と。

すべてを白と黒で割り切り、正しいことと間違っただけを峻別しなければ気が済まない思考スタイルの持ち主は、異なる文化や思想をもつ相手とディベートはできても、ダイアログはできないだろう。

ただし、ここでいう「ダイアログを通じて考えを変える」とは、無節操に自説を曲げることではない。じぶんの考えを絶対視せず、別の視点・他者の視点からも考える複眼的な柔軟さをもつこと、ひいては、物ごとの「両義性」をわきまえ、一つの単純な見方に凝り固まらないことである。

そして、これからの多文化共生社会を生きてゆくうえで、ダイアログとしての対話をする能力は必須の力になってゆくだろう。その能力をそなえた人こそ、これからの時代の「熟成した市民」なのである。

では、真の対話力を鍛えるために何をすればよいか。抽象的な言い方になるが、「聴く力」と「待つ力」を鍛えることから始めるべきだとわたしは考えている。

今の社会の評価制度においては、人の話を聴くこと、人の気づきを待つことは、能力として評価されない。しかし本来、「聴く」ことも「待つ」ことも、広義のホスピタリティ（人をもてなすこと）の中核をなす大切な営みであるはずだ。それは一言でいえば、（他者に）「時間をあげる」ということだ。

②「聴く」ことと「待つ」ことが正当に評価され、重んじられるようになったとき、人々の対話力も鍛えられ、「囁みきれない想い」をじっくり吟味する豊かな心も育まれてゆくだろう。

（鷺田清一「パラレルな知性」より）

管理番号：Z-1

2024年度 神奈川大学 A〇入学試験問題

3 / 3

A〇入学試験【小論文】

国際日本学部 国際文化交流学科

試験時間 90分

1 傍線部①に関して、具体的にどのような力か、文中の言葉をそのまま抜き出すのではなく、自分の言葉で具体的な事例を示して200字程度で説明せよ。

2 傍線部②に関して、これらの力を培い、それを正当に評価するための教育方法を考えて、1000字から2000字で記述せよ。その際、誰に対して、どのような機関でその教育を行うのかを文中で明らかにすること。なお、ここでいう教育とは、学校で行われるものにとどまらない。生涯教育、社会教育、職業教育、企業内教育…すべて教育である。
